

「神は全てを益とされる」Ⅲ

ローマ8：28

堀田修一 23・9・10

「神を愛する人たち（まず神に愛され、神の愛を信じ神の愛に感謝し神を愛する人たち）、すなわち、神の御計画にしたがって召された人たち（神の招きにより、主を信じた人たち）のためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」ローマ8：28

I 信仰後退者でさえ、神は、見放さず、私たちの究極的な益のために働かれ、私たちの最終的な栄化を生み出す益とされる。

1. 私たちは、外側に見えなくても、神との関係が近い時も、信仰後退の状況の時もある。しかし、神は私たちを見捨てず、見守り、色々な出来事やみことばを用いて信仰を養い続けておられる。世界中のどこの教会でも、信仰後退者、主と教会から離れている人々がいる。しかし、神は、その人々も見捨てておられない。私たちはみな弱い。互いに祈り合い支え合いたい。「祈りのノート」も用いたい。神は、その人々に起こるすべてを用い、神に立ち返るといふ益を下さる。ある人は、ある試練により教会から離れている間も神は見捨てられなかった愛に気づき神に立ち返り、主と教会から離れている前よりも、神に近くなり神を愛する信仰者に変えられます。私はそのような方々を知っています。自分の信仰生活も。神はすべてを益になさる素晴らしい方！

2. 神は私たちが自分の行った罪を理解し、真に悔い改め、神に立ち返る時、喜んで赦され愛され続ける。家に帰ってきた放蕩息子（ルカ15章）は、つらい経験、自分が蒔いた種の刈り取りを通して、父親のもとを離れる前よりも、はるかに、へりくだった息子となり、父の深い忍耐と温かい愛について知った。家を離れる前も父について知っていると思っていたが、十分には知ってはいなかった。自分が「まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き」（15：20）あふれる愛で歓迎した。その時、この息子は父親の愛を真に知り始めたのです。私たちも、信仰生活を続ける中で御父の愛を知り続ける。自分で蒔いたものを刈り取るという痛みの経験で我に返り、神に返り、御父の忍耐、愛について多くを知り続ける。このような体験により、私たちは、自分が絶えず恵みを必要としていること、絶えず油断せず目を覚まして祈るべきことを教えられる。私たちの身に起こる一切は私たちにとって神に立ち返り、神の義と深い愛を知る益となる。それは私たちの成長の一部であり、主の恵みと知識（神を深く知り続ける）とにおいて成長するプロセスである。神は信仰後退者も愛し続け、色々な事をともに働かせ、神に立ち返り神の愛をもっと知る益とされる。神の恵みの多くの面を見ることができる。私たちの敗北でさえ、私たちの益に変えられる。神は敗北や失敗さえ用い、私たちをもっとご自身に近寄せ、失敗しなければ決して学べなかった真理を知らせてくださる。失敗から学ぶ人は幸いです。主にある私の人生は、失敗から学び続けている人生です。過去の失敗が宝の教訓、益となる人生です。

Ⅱ 神は物事が起こるのを許して、それを私たちの益とされる。起こることを止めることもおできになるが、あえて止められないこともある。

1. 聖書が語る神の御業には、①積極的な働きと②神の許容的な働きがあることを覚えておくことは非常に重要です。人生の中で、時として理解できないことが起こる時、常に神が積極的にそれを行っておられると決めつけてはいけません。「神がおられるなら、なぜこんなことが起こるのか」と人間は問う。それへの聖書全体からの答えは、神は必ずしも、常に「積極的な」意図で、ある事を行っておられるのではないという答えである。ある事は、神の「許容」で起こる。その真理の最もよく知られている实例はヨブの生涯である。神は、ヨブを悪魔が辛い目に遭わせ、試みるのを「許容」された。この真理の理解は、私たちが神によって置かれている人生を理解するうえで、非常に重要な教理です。

2. 実業、職業、仕事、子の教育において人を訓練するためには、ある特定の事柄がその人に起こるのを許し、教訓を学びとらせる必要がある。常に何もかも肩代わりや後始末をしてやり過ぎて、蒔いた種の刈り取りをさせないならその人は、いつまでも学ばず、反省せず、成長しない。「人は種をまけば、刈り取りもすることになります」ガラテヤ6：7。それ故に神は、私たちの人生の辛い経験により学べるようにある物事が起こるのを許容される。「善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された」ヘブル5：14

Ⅲ 神は許容だけではなく、時として積極的に訓練となる物事を私たちのもとに送り、わたしたちの益とされる。

1. 父親が正しさと愛のバランスがなく、識別力のない愛で、常に子どもに、必要以上にお金や物を与えるのは真の愛ではない。子どもが、お金を無駄に使った場合、すぐに、また、お金を与えるのは正しい親ではない。無駄に自由奔放にお金を使うなら、困った状態になる刈り取り・結果、お金は正しく管理すべきだという教訓を味合わせる親は、正しさと愛のある親である。父なる神は、正に、義と愛に満ちた霊的な親です。その真理を明確に伝えているみことばは→「主は愛する者を訓練し（自分が蒔いたものを自分で刈り取らせ教訓を学ばせ）、受け入れるすべての子に、むち（人格を愛し注意をする）を加えられるのだから」ヘブル12：6。抱いて愛を示す時と巣立たせる時、旅立たせ経験を通して学ばせる時がある。

2. 神は、私たちが愛しておられる中で、私たちの人生に実り豊かな時と不毛で実を結ばず、忍耐しなければならない時も通される。農家の人々はそれを経験的に知っている。同じように働いても、実りの年と不毛の時がある。人間は、雨や風等の天候をコントロールできない。自分の仕事や勉強での乾ききった不毛な時も無駄ではない。自分の力だけで頑張ることの限界を知らされる。神に頼らなくても人間の力でやれるという高ぶりの罪が示され、へりくだらされる。実が現れない不毛が私たちが神に向かって前進させる益となる。また、すべてに神の時と御支配があると気づかせられる。「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みには（神の）時がある」伝道者の書3：1。

3. からからに乾ききった時期もあるが、神に祈り忍耐して、こつこつと日々、なすべき分を果たしていく時、時満ちて、神の実りの時という益がやって来る。ですから、不毛の時も失望し

てはなりません。祈りましょう。人生、学校、家庭、仕事、教会もそうです。忍耐の時と実りの時があります。実りは涙と忍耐の種まきの時があって初めて訪れるのです。「涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る」詩篇126：5。神は、忍耐の末、実りの時期を送り、私たちを元気づけてくださいます。祝福がないように見えても、時が来て以前にも増して神の臨在に近づき慰められます。「すべてのこと」は神によってともに働かされています。どれほど辛いものも、どれほど自分にとって不都合と思われるものも、究極的に私たちの益になるように全能の神により意図されています。

悪魔は私たちの内側に神への疑いを入れようと試み、私たちの心を不信仰と愚痴と不平で支配しようとしています。しかし、私たちの内に住んでおられる聖霊なる神は、神がすべての環境や状況を用いて私たちの益としてくださることを信じ抜く心、信仰を与えてくださいます。聖霊は次の最高のみことばを実行する力を下さいます→「いつも（すべてを益としてくださる神。神の救い、神の愛、恵みを）喜んでいなさい。絶えず祈りなさい（絶えず神と幸いな交わりを持ちなさい）。すべてのことにおいて（原語；すべての状況の中で。神の恵みを数えて、神がすべてを益としてくださるので）感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」Ⅰテサロニケ5：16—18